

令和 4 年度
福島県 大学生の力を活用した集落復興支援事業

小野町谷津作行政区業務実施報告書

獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム Part2

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次]	ページ
1. はじめに	1
2. 小野町谷津作行政区の概要と課題設定	1
2.1. 小野町・谷津作行政区の位置と概観	
2.2. 小野町の気候	
3. 小野町・谷津作行政区の現状	4
3.1. 小野町の人口動態と谷津作行政区の人口ピラミッド	
4. 今年度の活動実績報告と評価	7
4.1. 現地調査	
4.1.1. 生活関連施設	
4.1.2. 観光資源	
4.1.3. 地域資源	
4.1.4. 地域コミュニティ施設・イベント	
4.2. 「TERAKOYA プロジェクト」への継続参加	
4.3. 「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo2022～Winter～”」における福島復興支援 物産展の開催	
4.4. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会	
5. 活動を通して見えてきた課題	19
5.1. 抽出した課題	
5.2. 取り組むべき課題	
6. 次年度に向けた提案	21
6.1. 温泉マルシェ	
6.2. 既存の施設(公民館、研修センター)または新しいコミュニティスペースを作り足湯を併設	
6.3. 行政機関や専門機関との話し合いの場を設ける	
7. おわりに	23

1. はじめに

獨協大学地域活性化プロジェクト米山チーム Part2 は、2019 年度に福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」にはじめて採択されて、小野町谷津作行政区を担当することになった。2019 年度には現地調査を実施し、地域資源と地域課題を明らかにした。しかし新型コロナウイルスの影響で 2020 年度は申請見送りとなった。その間にメンバーも大幅に入れ替わったため、2021 年度は学び直しの期間と捉えオンラインを中心に活動を行った。実質 2 年目となる今年度は新たなメンバーを迎え、小野町、そして谷津作行政区に対する理解をより一層深めることを目標とした。対面での活動制限も緩和されたこともあり、今年度は現地で実態調査を行い、現メンバーで地域資源と地域課題を把握し、次年度以降の活動に対する方向性を固めた。

米山チーム Part2 は、福永侑真(代表：経済学科 3 年)、岡田遥高(同 3 年)、石川万優深(ドイツ語学科 3 年)、山本歩生(経営学科 3 年)、清水純(同 3 年)、坂口諒(国際環境経済学科 2 年)、梅橋萌(フランス語学科 1 年)、船上有紀(同 1 年)の 5 学科 8 人からなるチームである。

米山チーム Part2 メンバーは、2022 年 10 月 29・30 日の 2 日間、小野町谷津作行政区に現地調査に入り、図表 1 の行程表のとおり実態調査を実施した。小野町谷津作行政区区長で事業のカウンターパートである二瓶晃一氏をはじめ、小野町地域おこし協力隊の阿井由加子氏、谷津作行政区住民の斎藤直美氏に同行していただき、現地視察を行った。1 日目は町中心部を歩きながら小野町の歴史や全体像について説明を受けたあと、農地の一角で湧き出ている源泉の「大地の泉」を視察し他。夜には谷津作行政区の青年団の方や古くから住んでいる住人の方などを招き懇談会を行った。2 日目はコロナの影響で久しぶりの開催となった「小町ふれあいフェスタ」に参加させていただき、その後観光名所をいくつか訪れた。現地調査の中で小野町における多くの魅力と課題を知ることができた。また、現地活動以外にも昨年度から継続し「TERAKOYA プロジェクト」に参加し地元小野中学校の生徒と交流を図ったり、獨協大学内にて物産展の開催なども行ったりした。

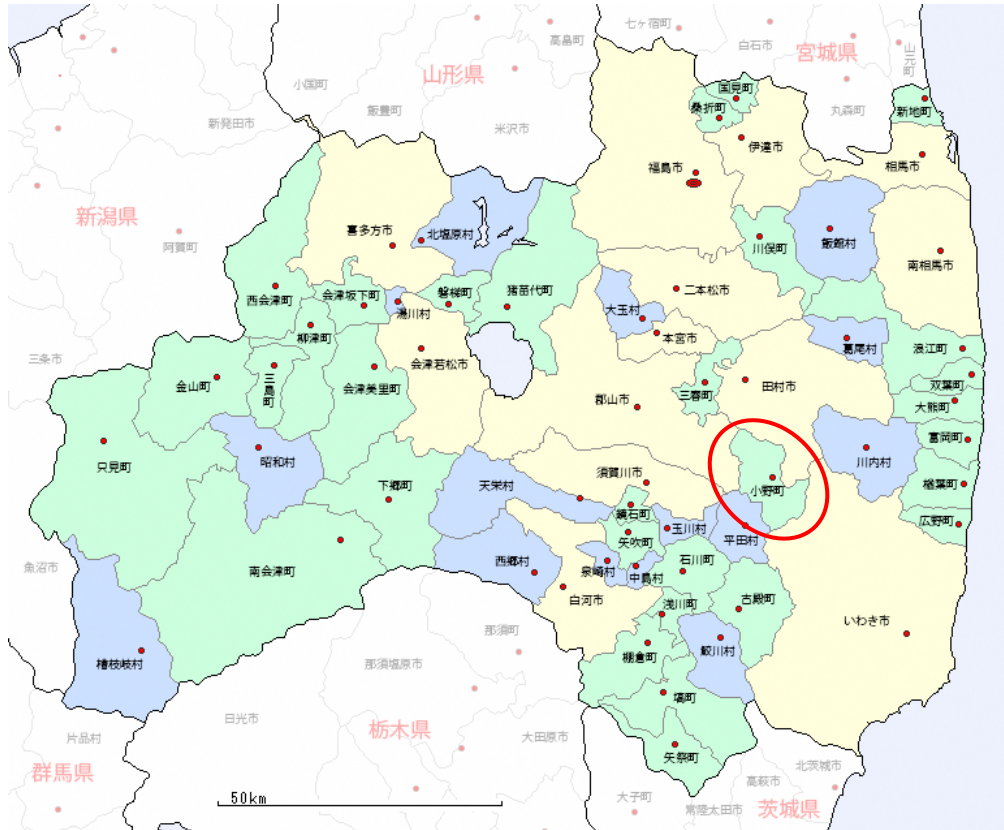
本報告書において、米山チーム Part2 の小野町谷津作行政区における今年度の活動実績について報告する。第 2 節では小野町谷津作行政区の概要と課題設定を述べる。第 3 節で今年度の活動実績を報告するとともに評価を行う。そして、第 4 節で次年度の活動にむけた提案について述べる。

2. 小野町谷津作行政区の概要と課題設定

2.1. 小野町・谷津作行政区の位置と概観

小野町は福島県中通りの東部に位置し、阿武隈山系の中心地に属し、田村郡の南部に位置している。北に田村市、南東にいわき市、南西に平田村、西に郡山市と隣接する(図表 1 参照)。小野町には 27 の行政区があり、谷津作行政区は旧小野新町に位置している(図表 2 参照)。

図表 1. 福島県小野町の位置



[出典]福島県の地図(市町村区分図)(<https://uub.jp/map/fukushima/>)

図表 2. 小野町の行政区分と谷津作行政区の位置



[出典]「都市と田園環境の共生等のあり方について」(事例発表)(小野町地域整備課)(以下の URL 参照)
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/29929.pdf>

小野町の沿革は、1889(明治 22)年に、飯豊村、小野新町村、夏井村が誕生し、1896(明治 29)年には小野新町村が小野新町になり、1955(昭和 30)年には、小野新町・飯豊町・夏井村が合併して、小野町が誕生した。図表 2 をみると、谷津作行政区は旧小野新町村に位置している。

小野町は郡山市といわき市のちょうど中間に位置しており、車でのアクセスは磐越自動車道で郡山 JCT から 39km(約 30 分)、いわき JCT から 37km(約 25 分)、電車のアクセスは JR 磐越東線で郡山駅から 50 分余り、いわき駅から 45 分弱の距離にある。このことから住民の生活圏も両方に掛かっている。

2.2. 小野町の気候

小野町は内陸性の気候で、山々に囲まれていることから山岳気候を呈する準高冷地である¹。この冷涼な気候や昼夜の温度差といった特性を活かして、水稻を主として、野菜、畜産、きのこ、葉タバコ等の農作物を生産している。気温が低く昼間と朝夕の寒暖差が大きいので、野菜がおいしく育つと言われている。

図表 3 の小野町の気候をみると、近年では最高気温が 36.0℃、最低気温も-12℃にもなる年もあるようだが、図表 4 の小野新町の雨温図をみると、1981～2010 年の過去 30 年間の平均では最高気温は 30℃に届いておらず、最低気温も-5℃程度である。近年では平年に比べて最高気温が上昇していると思われる。

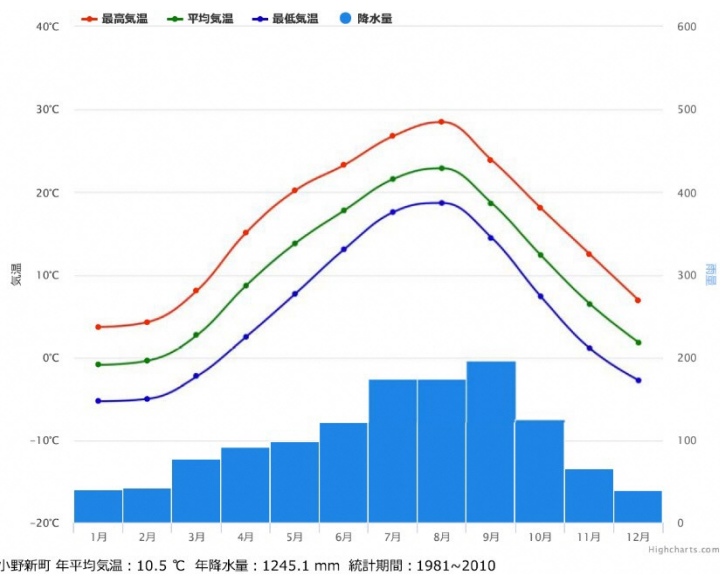
図表 3. 小野町の気候

年	気温 (度)			年間降水量 (ミリメートル)	平均風速 (毎時メートル)	年間日照時間 (時間)
	平均	最高	最低			
2016	11.5	33.5	-10.3	1,164	1.2	1,723.9
2017	10.6	35.1	-9.5	1,126	1.2	1,656.2
2018	11.6	35.2	-10.6	936	1.2	1,826.3
2019	11.4	35.7	-10.7	1332	1.3	1,687.4
2020	11.7	36.0	-9.7	1092	1.2	1,542.4
2021	11.4	35.3	-12.1	1343	1.2	1,622.0

[出典]小野町公式ウェブサイト「町の概要」「気候」(以下の URL)より引用。
(<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/gaiyou.html>)

¹ 小野町公式ウェブサイト「町の概要」「気候」(以下の URL)を参照。
(<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/gaiyou.html>)

図表 4. 小野新町の雨温図



[出典]「気温と雨量の統計のページ」「福島県小野新町の気候」(以下の URL)より引用。
 (<https://weather.time-j.net/Climate/Chart/Ononimachi>)

3. 小野町・谷津作行政区の現状

3.1. 小野町の人口動態と谷津作行政区の人口ピラミッド

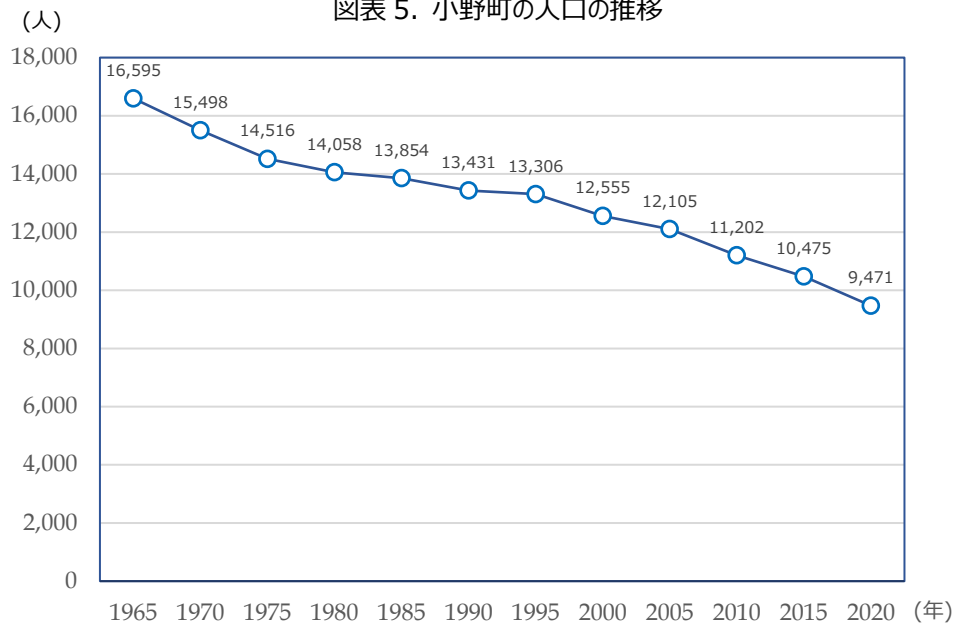
2022(令和 4)年 10 月 1 日時点で、小野町の人口は 9,018 人(男性 4,474 人、女性 4,544 人)、世帯数は 3,364 世帯である。

図表 5 は、1965(昭和 40)年以降 2015(平成 27)年までの小野町の人口の推移を示したものである。1965 年には小野町の人口は 16,595 人であったが、1980(昭和 55)年頃までは急速に減少して、その後 1995(平成 7)年頃までは緩やかに低下して 1995 年には 13,306 人となり、その後再び減少を加速させて 2015 年には 10,475 人となっている。その後、2020(令和 2)年には 9,471 人と 1 万人を切っている。

図表 6 は、1965(昭和 40)年以降 2015(平成 27)年までの小野町の世帯数の推移を示したものである。1965 年には小野町の世帯数は 3,295 世帯であったが、その後人口減少とは対照的に徐々に増加して 2005(平成 17)年には 3,714 世帯となり、その後低下に転じて、2020(令和 2)年には 3,398 世帯となっている。1 世帯当たりの平均人口は 1965 年の 5.0 人から、2020 年の 2.9 人に減少している。

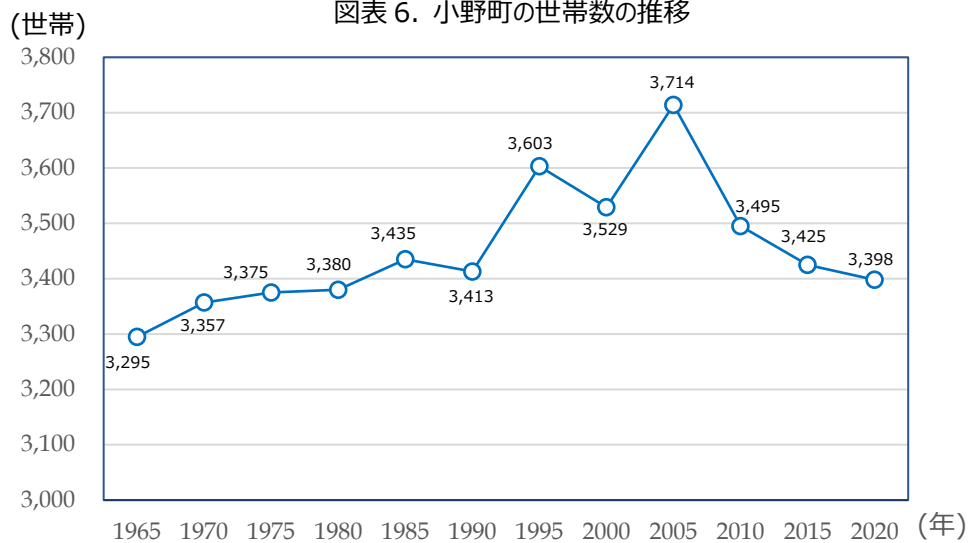
図表 7 は、1980 年から 2020 年までの小野町の年齢 3 区分別人口の推移を表したものである。1980 年に比べて 2020 年には年少人口(0～14 歳)が約 7 割減しているのに対して、高齢人口(65 歳以上)は約 2.3 倍に増えており、生産年齢人口(15～64 歳)はおおよそ半減している。1995 年には高齢人口(2,609 人)が年少人口(2,491 人)を上回るなど、少子高齢化の傾向が顕著になっており、小野町の高齢化率は上昇の一途を辿り、1980 年の 10.8%から 2020 年には 36.2%まで上昇している。

図表 5. 小野町の人口の推移

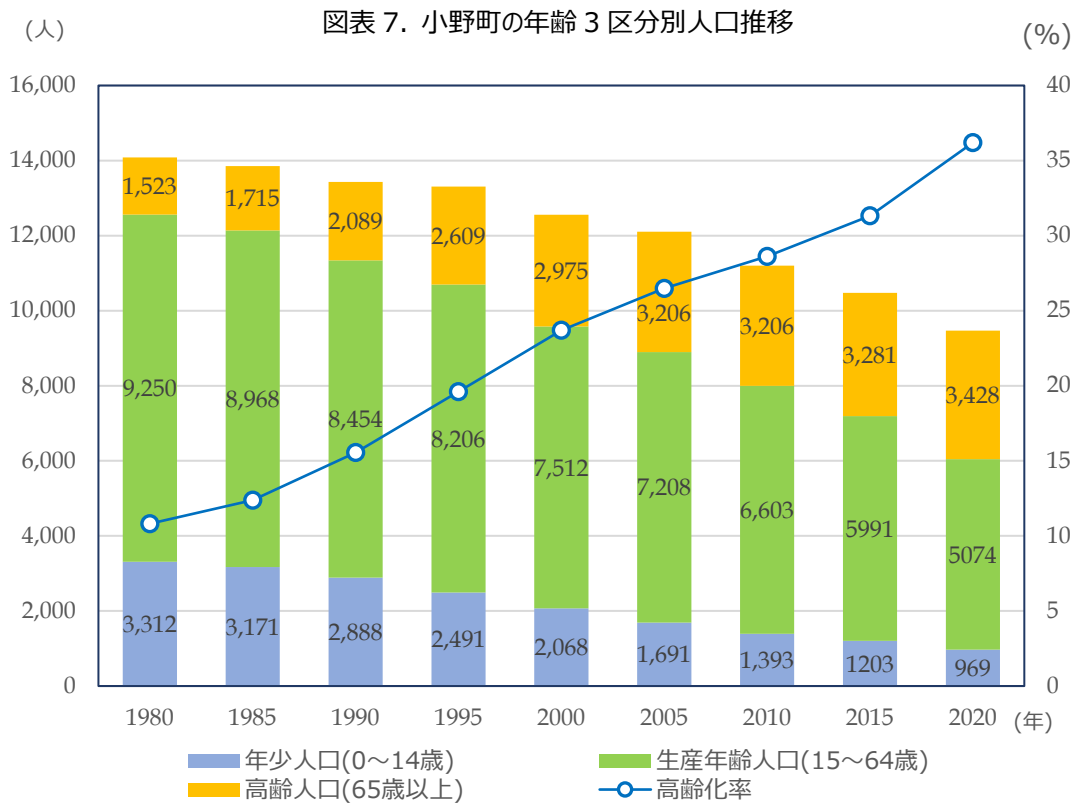


[出典] 『小野町公共施設等総合管理計画』(以下の URL を参照)を基に作成。[原資料]国勢調査による。
 (<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/kanrikeikaku.html>)

図表 6. 小野町の世帯数の推移



[出典] 『小野町公共施設等総合管理計画』(以下の URL を参照)を基に作成。[原資料]国勢調査による。
 (<http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/2/kanrikeikaku.html>)

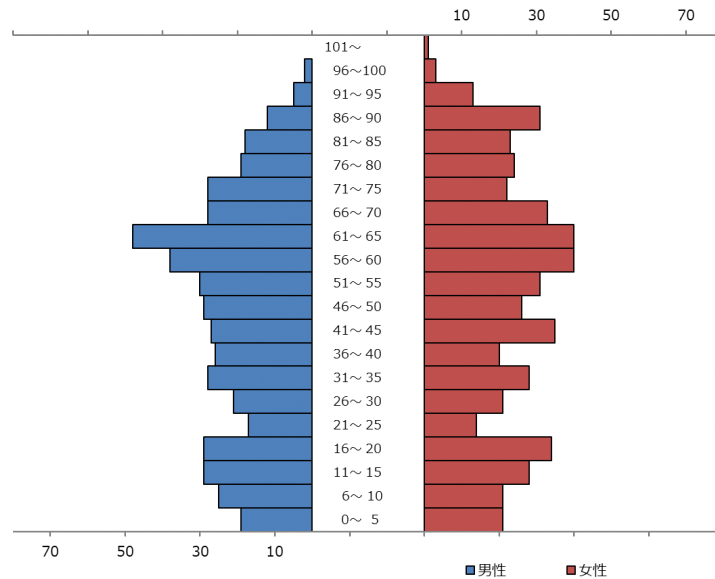


[出典] 『小野町人口ビジョン(第1版)(2015年10月)』(以下の URL を参照)、および 『小野町公共施設等総合管理計画(改訂版)(2022年3月)』(以下の URL を参照)より作成。
<http://www.town.ono.fukushima.jp/uploaded/attachment/5718.pdf>
<https://www.town.ono.fukushima.jp/uploaded/attachment/11687.pdf>

学校生徒数は 2021(令和 3)年時点で幼稚園生徒数が 14 人、小学校児童数が 426 人、中学校生徒数が 248 人となっている。

谷津作行政区の人口は 2020(令和 2)年 1 月 31 日時点で、987 人(男性 478 人、女性 509 人)である。図表 8 は、その時点での谷津作行政区の人口ピラミッドを図示したものである。男女とも 21~25 歳の年齢区分が大きくくびれている。男女とも 21~30 歳の年齢区分が少ないことは、子育て世代が少なく少子化を引き起こしている要因とも考えられる。

図表 8. 谷津作行政区の人口ピラミッド



[出典]小野町役場企画政策課より提供されたデータより作成。

4. 今年度の活動実績報告と評価

今年度の米山チーム Part2 は大きく 3 つの活動を行い地域に対しての理解を深めたり、住民との交流、大学周辺での事業への認知の向上を図った。以下でそれぞれの活動について紹介していく。

4.1. 現地調査

今年度の大きな活動として、10月29日(土)・30日(日)の1泊2日で、メンバー8人全員で現地に入り、小野町について現地で直に学ぶとともに町民とのふれあいを体験し、理解を深める貴重な機会となった(図表9参照)。実際に街を歩き小野町のスポットや谷津作行政区をめぐる、活動の様子とともに地域資源や各地の概要や感じたことを紹介する。

図表 9. 現地活動行程表

時程	行程
10月29日(土) 8:33~ 9:31	東北新幹線やまびこ 127号(仙台行き)(58分) 大宮駅発~郡山駅着
9:41~10:35	JR 磐越東線(小野新町行) 郡山駅発~小野新町駅着
11:00~16:30	小野新町駅にて現地スタッフと合流後、小野町で昼食 徒歩にて源泉へ 小野町市街地を現地スタッフに案内していただきながらまち歩き
17:00~19:00 19:30~	「小町の湯」にてお風呂・夕食 谷津作行政区研修センターにて地元の方との懇談会(16~20人程度) *住民の意見や考えを聞くとともに課題を見つけ出す。
10月30日(日) 7:30~ 8:30	宿にて朝食

9:00～12:00	<p>「小町ふれあいフェスタ」を見学ならびにブースの手伝いや販売補助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康まつりの会場(体育館)で健康チェック的なブースのお手伝い 体組成計の計測、体カテスト(30秒時間測定、上体起こしの見守り、ブース内での声掛け) ・もしくは「宝来屋」という味噌・麴屋さんのブースでの販売補助 ・空きブースにて展示資料の展示(Earth Week Dokkyo 2021 の際の紹介ポスター、活動報告会資料等)* 事前に印刷 <p>販売ブースでのアンケート</p>
12:00～13:00	昼食
13:00～15:00	郊外の小野町スポットを見学(東堂山等)
15:30～16:22	JR 磐越東線(郡山行) 小野新町駅発～郡山駅着
16:30～17:23	東北新幹線 やまびこ 150号(東京行)(52分) 郡山駅発～大宮駅着

4.1.1. 生活関連施設—小野新町駅、夏井駅、農産物直売所「おのげんき」、スーパー、ドラッグストア、役場、小学校、中学校、高校(数年後に合併)、病院、旅館(小町の湯)、アイスバーガー(シェフリー松月堂)、イタリアン(チルコロ・イル・ピッコロ・カンポ)

小野町の主な交通手段は自動車である。住民は車を使用し郡山やいわきに出かけることが多い。しかし、鉄道も通っており JR 磐越東線の停車駅である小野新町駅と夏井駅に2つがある。町外に通学をする学生はこれらの駅を利用している。

小学校は町内に4か所あり谷津作行政区の小学生が通う小学校は小野新町小学校である。小野町に唯一存在する小野中学校に進学することになる。高等学校は小野町に小野高校があるが、悔しくも今年度隣町の船引高校との統合が決まり数年後に船引に移ることとなってしまった。

小野町には公立小野町地域総合病院がありスーパーやドラッグストア、コンビニエンスストアもあることから生活には困らないだろう。農産物直売所「おのげんき」は農家の方が作っている農産物の販売だけでなく特産品の販売なども行っている。今回の調査で宿泊した旅館「小町の湯」をはじめ町内には複数の宿泊施設が存在しており、キャンプ場もある。

29日の昼食として立ち寄ったイタリアン・レストランの「チルコロ・イル・ピッコロ・カンポ」をはじめ小野町にはおいしい飲食店が何か所もある。菓子店である「シェフリー松月堂」で販売されている小野町のB級グルメ「アイスバーガー」はアイスクリームを温かいパンズで挟んだもので温かさと冷たさを同時に感じるができる非常に斬新なものであった。味もちろんおいしかった。

写真 1. チルコロ・イル・ピッコロ・カンポのパスタ



写真 2. アイスバーガー



また今回の調査では寄ることができなかつたが中華そばの名店である「仙台屋食堂」はメニューが2種類しかないが、毎日多くの人々が食べに来るといふ。ほかにも個人で営むおいしい飲食店が何店舗もあるようだ。

4.1.2. 地域資源(伝統資源)一和久稻荷神社、塩竈神社、大地の泉

源泉である「大地の泉」は観光スポットではないものの大きな地域の資源であるといえるだろう。源泉が地下から湧き出ているこの土地にはかつて地域住民の交流拠点ともなっていた旅館小町温泉が2008(平成20)年頃まで存在していた。昔、地域住民は顔パスで入ることができ夏場は畑で作業した人々が汗を洗い流したりしていたそうである。一方、冬場になると宿泊客が多かったとのことである。地域住民は無料で入ることができていた分、旅館の手伝いをしていたそうで湯を沸かすのに必要な薪を拾いに行ったり、薪を割ったりしていたと住民の方がおっしゃっていた。

小町温泉は地域住民に支えられながら営業していた。しかし廃業となった後、震災が起こり源泉は影響を受け止まったが1か月後再び湧き出ることとなり、これは周辺の源泉よりもかなり早く湧き出た。奇跡的に復活した源泉を残そうと本事業のカウンターパートでもある小野町観光協会会長の二瓶晃一氏が「大地の泉」と名付けた。実際に訪れてみたところかなりぬかるんでおり、いまの建築法ではこのままの土地であれば建物を建てられないとのことであった。また土地の権利の問題もあり活用段階にいくまでにさまざまな障壁があると感じた。

写真 3. 源泉「大地の泉」



和久稻荷神社は谷津作行政区にある神社の 1 つで商店街の通りから夏井川を渡った先にある。中学校がすぐ近くにあることから谷津作のお祭りや運動会などを行っていた場所でもあるそうだ。

29 日に訪れた塩竈神社では例年、例大祭と呼ばれる田村地域でも比較的規模の大きいお祭りが開催されている。400 年もの間続いている伝統あるお祭りで伝統文化の継承のほか、地域交流の促進といったことも開催の意義となっているそうだ。

4.1.3. 観光資源—東堂山万福寺、リカちゃんキャッスル、夏井千本桜、諏訪神社の翁スギ媼スギ

リカちゃんキャッスルは小野町を代表する観光スポットの 1 つである(写真 4 参照)。1993 年に建てられたリカちゃんキャッスルは非常に多くの観光客が訪れにぎわっていたが震災やコロナウイルスの影響もあり近年は減少傾向にあるとのことだった。

写真 4. リカちゃんキャッスル



また、まちの中心部から見て北に位置する東堂山万福寺も小野町のシンボリック的存在である。「家畜繁殖・守護」のご利益があるとされておりまた文化財に指定されている東堂山のスギ林や東堂山鐘楼がある。さらに圧巻だったのは観音堂を超えた先にあった昭和羅漢で

ある(写真 5 参照)。小野町制 30 周年の記念として当寺に奉納されたものであるがその数は現在 500 体を超えている。そして羅漢像一体一体が違う表情をしていたり物を持っていたりと非常にユニークでバリエーションに富んでいた。

夏井地区にある諏訪神社には国の天然記念物に指定されている爺杉と媪杉が並んで立っている(写真 6 参照)。奈良時代から存在する巨大な杉で 2 本の木の間はわずか 1 メートルほどしかなくこれほどの巨木がこの空間にまっすぐとそびえたっているのは非常に壮大であると感じた。

写真 5. 昭和羅漢



写真 6. 諏訪神社の爺杉と媪杉



小野町にはこれらの観光資源が存在しており、事前に知識を頭に入れた状態でスポットを巡ったが、実際に訪れると想像をはるかに超える圧巻の数々であった。また、今回は時期的な都合もあってみることはできなかったが、夏井川は春の季節に桜の名所となっている。延々と咲いている桜は非常に美しく訪れた人を魅了する。

4.1.4. 地域コミュニティ施設・イベント

小野町には地域でのコミュニティを育む施設として、谷津作行政区の谷津作研修センターと小野新町行政区のふるさと文化の館がある、地域コミュニティのイベントとしては小野運動公園で行われる「小町ふれあいフェスタ」がある(図表 10 参照)。

谷津作研修センターは地域住民の教養を高め連帯意識の高揚を図るために設置された施設とのことである。今回の現地調査では 29 日の夜に谷津作研修センターにおいて、地域住民の方々との交流を図るために意見交換会を実施した(写真 4 参照)。

図表 10. 小野町のコミュニティ施設

施設名(イベント名)	所在地	概要
谷津作研修センター	福島県田村郡小野町大字谷津作字前之内 57	谷津作行政区の交流拠点の1つ
ふるさと文化の館	福島県田村郡小野町大字小野新町字中通 2	まちの文化を知るための中心施設
小町ふれあいフェスタ(小野運動公園)	田村郡小野町大字小野新町字美売 65-1	文化と産業の祭典。オールドカーミューティングやeスポーツイベント、健康祭りなどが開催。

写真 7. 谷津作研修センターでの意見交換会の様子



ふるさと文化の館は図書館、郷土資料館、記念館が一体となった複合施設である(写真 8 参照)。1 階部分では小野町の歴史や昔の暮らしの様子を忠実に再現し紹介している郷土資料館と、町立図書館がある。図書館の奥を上がった 2 階部分には小野町出身の作詞家、丘灯至夫の生涯や書いた作品の数々、愛用の机や小物などを見ることができた。建物の中ではゆとりのある空間が広がり外には小川が流れており、自然と調和した場所で観光客に加え、地域住民も自由に気軽に立ち寄れる場所となっていた。

写真 8. ふるさと文化の館の外観(左)と施設内にある郷土資料館において説明を受けている様子(右)



また、10 月 29・30 日に実施されていた「小町ふれあいフェスタ」は町内に限らず町外からも多くの人々が訪れお祭りの中の企画ではさまざまな人と交流できるものが開催されて

いた(図表 11 参照)。いくつか紹介するとグラウンドではオールドカー・ミーティングが行われており全国各地から自慢の愛車を展示しに來たりほかの参加者の車をみたりと、出展者から一般の方まで非常に多くの方で賑わいを見せていた。また、体育館の中では健康ブースが設けられ体力測定を行っていた(写真 9 参照)。30 日にはメンバーが実際に測定の補助に入り、測定者との交流を行った。また、さまざまな商品を販売する販売ブースではお店の販売補助をメンバーが行い商品の魅力を PR しながら販売した。さらにブースを借り資料をポスターサイズで展示することで当事業の PR 活動も行った。

図表 11. 「小町ふれあいフェスタ」のポスター

2022 小町ふれあいフェスタ

10/29(土) 9:00~16:00 / 10/30(日) 9:00~15:00

会場: 町民体育館

健康まつり

あぶくま高原 新そばまつり

魅力いっぱいの出店

小町町 オールドカーミーティング開催!

eスポーツフェスティバル

主催/小町ふれあいフェスタ実行委員会 共催/小町町・小野町教育委員会

写真 9. 「小町ふれあいフェスタ」での体育館での体力測定の様子(左)とポスター展示(右)



図表 12. 実態調査の評価と展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・小野町の雰囲気や魅力を実感することができた。 ・オンライン上での学びやデータ上での知識とは違った新しい発見も多くあった。 ・オンライン・ミーティングのメンバーだけではわからなかったまちの課題について現地住民の方から聞くことができた。 ・意見交換会や「小町ふれあいフェスタ」などで現地の方と交流することができた。 ・小野町の温かさを感じることができた。 ・経費計算などの事務的な部分でミスが出るなど、メンバー間での情報共有が充分でなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・区長や町長、行政機関などと話し合いの場を設けたい。 ・メンバーそれぞれに役割を割り振り、情報を共有できる環境をつくる。 ・学びだけでなくまちをどうしていきたいか逆算し、まちや地域資源を見ていく必要がある。

4.2. 「TERAKOYA プロジェクト」への継続参加

昨年度に引き続き、2022 年度も TERAKOYA プロジェクトに参加し小野中学校の生徒と交流を図った(図表 13、14 参照)。中学生との交流はなかなか体験できない貴重な時間なので彼らから学ぶことも多くあった。

図表 13. TERAKOYA プロジェクトへの参加

実施企画名	TERAKOYA プロジェクト
開催日	2022 年 10 月～12 月の平日放課後 16 : 30～18 : 00
開催場所	小野中学校会議室(大学生のサポートメンバーは Zoom にて参加)
企画概要	<ul style="list-style-type: none"> ・高校受験を控える中学 3 年生を対象に学校終了後の 2 時間程度の時間を使い集団授業と個別指導を組み合わせながら行う学習サポート ・主催は「まちづくり office こまち Vision」 ・本チームはこの団体と協力し、本プロジェクトに学習サポートや進路アドバイザーのような立場で参加 ・参加メンバーは経済学科 3 年の福永侑眞、同 3 年岡田遥高の 2 名である。数学や英語を中心とした勉強面での指導のほか、受験期の過ごし方

	<p>や高校生活のアドバイスなどを通じて地元の中学生と交流した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生からの質問では獨協大学のことについてや進路選択について高校生活で気を付けなければならないことなどを聞かれた。
評価	<p>大学生と中学生の交流を通じて双方の今後の学生生活における刺激となった。</p>

図表 14. TERAKOYA プロジェクトの評価と展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・小野町の中学生との交流ができた。 ・中学生は私たちに興味を示してくれているようだった。 ・メンバーの参加人数が少なかった。 ・受験生に対してアドバイスができた。 ・中学生がまちに対して感じていることを把握できた。 ・勉強や進路以外の雑談も交えて行えたため昨年度よりも距離感が縮まったのではと感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間はもう少し長くてもよいかもしれない。 ・教える科目をもっと増やし、参加メンバーの得意科目を教えられるようにしたい。 ・参加人数を増やす。 ・ある程度長い期間で行っているので一人二回参加など回数を決めて参加するとよいかもしれない。 ・質問事項を事前にまとめて中学生に読み込んでおいてもらうと具体的な回答を得やすくなると思うので改善する必要がある。

4.3. 「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo2022～Winter～”」における福島復興支援物産展の開催

2022年12月には獨協大学の獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”というイベント期間内の企画として本事業に携わる複数チームで合同開催した(図表 15、16 参照)。大学周辺地域の人、学生、大学職員の方々は福島県の物産に興味津々であった。小野町の特産品を販売し(写真 10 参照)、同時に小野町のパンフレットもお客さんに配布して、全体として課題も残ったものの地域をPRできる機会となった。福島復興支援物産展における米山チーム Part2 の収支計算書は図表 17 のとおりである。

図表 15. 福島復興支援物産展の開催

実施企画名	獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo 2022～Winter～”における福島復興支援物産展の開催
開催日	2021年12月12日(月)～16日(金)の昼休み(11:30～13:00)
開催場所	獨協大学学生センター雄飛ホールの北側の内外
企画概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学内において冬季 Earth Week Dokkyo が開催され、米山チーム part2 は 12～16 日の 5 日間の昼休みの時間帯に、小野町の PR を目的に小野町特産品を出品した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント前には隣接する団地へ本イベントのチラシをポスティングし地域住民へのポスティングをするとともに学内において看板を設置したり宣伝も積極的に行った。 ・販売した商品は小野町の特産品であるサトパン、バトンクッキー(えごま・フロマージュ)、ぬれ花豆、燻製味玉、一笑漬け、一笑漬けドレッシング、生ラーメン(醤油・味噌)の計9品(写真4)を販売した。 ・商品の販売と同時に小野町のパンフレットもお客さんに配布した。
今後の課題・展望	<ul style="list-style-type: none"> ・無事完売した多くの方に小野町を知ってもらうことができた。 ・段取りの悪さは今後における大きな課題である。

図表 16. 福島復興支援物産展の評価と展望

評価	展望
<ul style="list-style-type: none"> ・チラシを近隣住民に配るのが遅くなってしまい開催序盤は人がまちまちだった。 ・学生のお客さんが少なかった。 ・作ったチラシの出来が悪かった。 ・事前に味がわからないものがあったのでお客さんに聞かれたときにより詳細に説明することができなかったかもしれない。 ・都合の関係もあったがメンバーの参加率があまり高くなく参加メンバーも固定されてしまった。 ・開催までの段取りが悪くスケジュールが急になってしまったことで現地の方々に迷惑をかけてしまった。 ・学生に限らず、大学職員や地域住民の方など多くの人にお越しいただいた。 ・他地域の特産品や野菜などを見ることができ刺激をもらえた。 ・昨年度同様現地の方々と販売商品を話し合いながら決めることができた。 ・販売数量は去年の反省を生かし個数を調整できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・可能な限り参加を呼びかけチームとして活動できる体制を整える。 ・段取りをよくし、都合が合えばぜひ現地の方々に参加して一緒に PR していただきたい。 ・今回の販売数などを考慮して次回以降は見積もりを正確に。 ・駅前などで呼び込みをして今回よりもお客さんを増やしたい。 ・実際にメンバー同士で味見をして各商品の特徴やアピールポイントなどを事前に確認しておく。

写真 10. 福島復興支援物産展に出品した小野町の特産品

・燻製味玉

こだわりの卵で作った燻製卵を 3 日間煮込んで仕上げた逸品



[出典] スモークハウス「商品紹介/味たまご」(以下の URL)より引用。

(<https://www.kuntama.com/item/ajitamago/>)

・ぬれ花豆

選りすぐりの大粒の花豆を昔ながらの独自の 방법으로糖蜜を通し仕上げている



[出典]ふくらボ!「渡久製菓株式会社/小野町柏屋」(以下の URL)より引用。

(<https://www.fukulabo.net/shop/shop.shtml?s=29>)

・砂糖パン

生地の中にはあんこが入っており、外側は砂糖でコーティングされている甘いお菓子(今回はペーストタイプとまぶしタイプが 3 個ずつ入っているものを販売。



[出典]『令和元年度小野町谷津作行政区実態調査報告書』15 ページより引用。

・バトンクッキー

地元小野高校が沖縄県の八重農高校と共同開発してつくられたクッキー



[出典]メンバーによる撮影

・一笑漬け

小野町の特産品であり調味食品にもなる漬物の一種。しその実や米麴が入っておりご飯にも冷ややっこなどにも相性抜群



[出典] スモークハウス「商品紹介/おのっこ一笑漬け」(以下の URL)より引用。

(<https://www.kuntama.com/item/ajitamago/>)

図表 17. 福島復興支援物産展の収支
支出

商品名	店名	単価	個数	金額(円)
ぬれ花豆	渡久製菓	330	15	4,950
味玉	スモークハウス	360	7	2,520
一笑漬	スモークハウス	400	5	2,000
一笑漬ドレッシング	スモークハウス	400	10	4,000
バトンクッキーえごま	シェフリー松月堂	120	10	1,200
バトンクッキーフロマージュ	シェフリー松月堂	160	10	1,600
ラーメン(醤油)	越坂製麺所	290	4	1,160
ラーメン(みそ)	越坂製麺所	360	4	1,440
サトパン	松本菓子店	424	8	3,392
小計				22,262
送料	ヤマト運輸	1,895	1	1,895
	ヤマト運輸	1,367	1	1,367
	郵便局	520	1	520
小計			3	3,782
合計				26,044

収入(売上)

商品名	店名	単価	個数	金額(円)
ぬれ花豆	渡久製菓	330	15	4,950
味玉	スモークハウス	360	7	2,520
一笑漬	スモークハウス	400	5	2,000
一笑漬ドレッシング	スモークハウス	400	10	4,000
バトンクッキーえごま	シェフリー松月堂	120	10	1,200
バトンクッキーフロマージュ	シェフリー松月堂	160	10	1,600
ラーメン(醤油)	越坂製麺所	290	4	1,160
ラーメン(みそ)	越坂製麺所	360	4	1,440
サトパン	松本菓子店	424	8	3,392
合計			73	22,262

4.4. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

2月11日(土)に福島県で「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会が行われ、米山チーム Part2 は代表の福永とメンバーの坂口が参加した(写真 11 参照)。多くのチームの活動報告を聞き、次年度以降の参考となることもあった。活動報告会後には交流会も行われ、興味があったチームへ話を聞きに行ったりと刺激を受けたとともに今後も他チームに負けないうくらい頑張ろうと気持ちを入れなおすきっかけにもなった。

写真 11. 福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告の様子



5. 活動を通して見えてきた課題

5.1. 抽出した課題

(1)住民間での交流・つながりの減少

29 日夜に谷津作研修センターで谷津作行政区に住む青年層から高齢層までの住民の方々と意見交換会を行い住民視点での地域の問題点をあげていただいた。青年団の方が持つ大きな問題意識として挙げていたのは「若者の住民間での交流機会が減少したことによって年々つながりが希薄になっているということである。地域内には交流機会やコミュニティスペースといった場所は少なくコロナの影響もあったことで近年ではより深刻な状況となっている。現地の実態調査をする以前の私たちは印象として地域でのつながりが強いイメージを持っていたが、若者の意見ではイメージとはかけ離れた状況であることが今回把握できた。

(2)大地の泉活用に対するさまざまな障壁

現地住民の方の話を見ると源泉である「大地の泉」を活用するためにはさまざまな障壁があることが理解できた。まず地権の問題である。旅館である小町温泉が建っていた当時はこの土地は共有地とされていたが、現在では土地の所有者が存在しており問題は容易ではない。

さらに土地の性質も問題だといえる。この土地は源泉が常に湧き出ている状態であるため土に水分が浸透しぬかるんでいる。かつて旅館が建っていたが現在の制度では建物の建築などは安全上の観点から制限されているようである。写真 12 の通り、源泉の周りには何もなく畑の中にポツンと存在している。そして湧き出た水分を豊富に含んでいる土地のため常にぬかるんでいる。

写真 12. 源泉周辺の土地



(3)地域の活気が少ない

実際に現地を歩いて感じたことだが地域内での活気がある様子はほとんど見受けられなかった。週末ではあったものの中心地でも人が歩いている様子は少なかった。30日にはまちのイベントである「小町ふれあいフェスタ」にも参加させていただいたが、コロナ禍で2年開催しておらず、2022年は3年ぶりの開催だったので、コロナ前と比べて大幅に来場者が減少したという話もお聞きした(写真13参照)。

写真 13. まちのイベント「小町ふれあいフェスタ」の様子



(4)若者の担い手不足

意見交換会の中では地域のお祭りや運動会などのイベントを取り仕切る若者の存在がい

ないとの声も上がった。有志の方々が集まる谷津作青年団は現在 11 人となっており、若者が少ないのもあるが中には青年団に参加したがない住民もいるという。地域に対する価値や地域貢献する意義を見出せないために参加が進まないのも問題点として挙げられるだろう。

(5) 高校がなくなる

今年度、小野町唯一の高校である県立小野高校が近隣自治体にある船引高校との統合が決定し数年後には小野町に高校がゼロとなってしまうこととなっている。しかし、小野高校は総合学科を導入する高校で姉妹校である沖縄県の高校との交流を盛んに行ったり、部活動やクラブ活動としても大きな成果を残している。地域に根差した活動を行っておりまちにとって欠かせない機関の 1 つでもあった。

5.2. 取り組むべき課題

活動を通して学生が感じた地域の課題、住民が日頃から感じていた大きな課題として地域住民のつながりが少ない点だと考えた。住民同士特に若者世代のつながりが希薄であるため交流を図ることのできるイベントや交流機会の創出が重要である。こうした取り組みに住民が参加してくれることができれば最終的に地域住民の満足度の向上や地域貢献活動などといった地域での取り組みに主体的な参加が期待できるだろう。そしてそうした取り組みを行っていくにあたって貴重な地域資源である源泉「大地の泉」を活用することは住民にとって大きな意味を持ち、活性化していくための要素として充分である。

6. 次年度に向けた提案

6.1. 温泉マルシェ

谷津作行政区、そして小野町全体を盛り上げていくためのアプローチ方法としてマルシェを提案したい(図表 18 参照)。ここでは「大地の泉」にちなんで温泉マルシェという形で紹介していく。住民へのヒアリングや意見交換会などから住民の中でも源泉が湧き出ていることを知らない人々は多いようだ。源泉が湧き出ているこの地を知ってもらうことを目的とし全国各地の、温泉にちなんだ商品を販売する。他地域の商品をここで行うことにより少なくとも住民が興味・関心を持ってくれると考えた。隣の田村市瀬川地区で集落復興支援事業を行っているセガワ応援隊は「軽トラマルシェ」を企画・開催し住民から高い評価を得ており、「軽トラマルシェ」というイベントが住民間の交流の拠点となっていた。こうした取り組み事例を参考にしながらまちにあったマルシェの形を模索していきたい。

図表 18. 温泉マルシェの開催の提案

企画の概要	・源泉が湧き出ている土地や徒歩圏内にある小野新町駅前のスペースを使い小規模なマルシェを開催する。
-------	--

	<ul style="list-style-type: none"> ・地元の特産品、小野高校が商品開発したもの、源泉周辺地域での農産物などと合わせて温泉にちなんだ商品(食品や雑貨)を販売。 ・大地の泉のPR活動も盛り込む。
期待される効果	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民、町外の来場者など幅広い人たちの参加が見込める。 ・地域資源で魅力の1つでもある「大地の泉」について知ってもらうことができ住民全体で源泉を活用した主体的な取り組みへの参加につながる。 ・私たちのチームのメンバーも地域の人と関わり、そして交流をすることで小野町についてもっと知ることができる。 ・住民同士がコミュニケーションをとることができる1つの交流拠点としての機能にも期待ができる。 ・町内外から来場者が集まることで、将来、小町温泉が復活した際に、「行ってみよう」という顧客を増せる。
具体的な企画案	<p>[時期]秋～冬頃</p> <p>[場所]小野新町駅前スペース</p> <p>[客を呼び込む仕組みづくり]小学生に「マルシェ開催のお知らせ」を家に持ち帰ってもらい、ご家族に広報する。地域の回覧板で広報する。小野町のホームページにアップしてもらう。SNSで発信する。小野新町駅掲示板ならびに郡山駅掲示板での掲示。</p> <p>[イベント]温泉グルメ試食会の開催など</p>

6.2. 既存の施設(公民館、研修センター)または新しいコミュニティスペースを作り足湯を併設

私たちが今年度実現可能性を考えずに提案した小野町での健康娯楽施設の設置案は現実的な観点から述べるとコスト面から難しい。しかし住民によると行政はまちづくりの方針として「健康」をコンセプトにしているとお聞きした。そこで提案の中のコンテンツの1つである足湯を用いた活性化の提案をしたい。足湯がある場所は温泉地が多いため単純比較はできないが人が多く訪れやすく一定の集客効果を持っているといえる。有名な温泉地ではなく、今回は地域住民に焦点を当てたものになるので設置場所としてはコミュニティスペースといわれる場所を想定している。既存の施設でいえば、町の公民館であったり、谷津作では研修センターが当てはまるだろう。普段住民同士が座って話す椅子の足元に設置することで交流の活性化を図る。または新しいコミュニティスペースとして源泉周辺地にあらたに場所を設けベンチと足湯を設けることで住民が休憩がてら交流を図ることができるのも面白いだろう。

図表 19 では足湯を利用して地域活性化につなげた事例を紹介する。福島県いわき市は湯元温泉地という観光地である。この図表を見てみると鶴の足湯を整備した後は大幅に利用者が増加していることがわかる。ここまでの効果とはいかなくても利用客を一定以上確保することは可能だろう。

図表 19. 足湯を利用した活性化の事例

名称	所在地	目的	効果
鶴の足湯	福島県 いわき市	地域交流、憩いと潤いの空間を創出し地域の活性化を図る	鶴のあし湯利用者 平日：80～100 人/日 休日：150～200 人/日 H18.12.1～12.31：3,000 人/月

6.3. 行政機関や専門機関との話し合いの場を設ける

前述した上記 2 つの提案は源泉である「大地の泉」を活用した提案になっているが源泉が湧き出ている土地の地権や土地の性質上の問題は私たちだけでは困難である。今年度や次年度開催をするにあたってこれらの問題は避けては通れない問題であるため専門家の調査や行政との話し合いの中で活用における障壁を少しでも低くしていくことは積極的に行っていかななくてはならない。湯量や泉質、温度や立地など様々な条件を調査してもらいそれらの調査を踏まえた提案をしていく必要がある。

7. おわりに

さまざまな活動を行ってきた今年度だが、総括として今後のチームでの活動における方向性が明確になった 1 年間であった。昨年度はオンラインでの活動が中心であったため現地の方との交流はオンライン・ミーティングのメンバーに限定されていたが、今年度から本格的に対面での活動を行ったことにより交流の幅が広がり様々な立場、年齢層の住民とのコミュニケーションをとることができた。特に現地調査では住民と深く話す機会を設けていただき学びを深める時間となった。そしてメンバー全員が現地に入ったことにより地域に対しチームとして共通理解ができたとともに一人ひとりがより主体的に活動に取り組む機会となった。小野町、そして谷津作の地域住民の方々にはとても暖かく接していただいた。これはオンライン上のつながりでは十分に感じる事が難しく、こうした取り組みを通し現地の方々との交流が生まれ町の雰囲気、住民の気質を感じる事ができたことは本事業が持つ大きな意義でありこうしたつながりが地域を活性化させる大きな要素になるのだろうと感じた。住民同士でのつながり、住民と外部の人間のつながりなどさまざまな人同士のつながりを意識し、そこに大学生ならではの価値を提供しながら次年度以降も地域の活性化に携わっていききたい。

謝辞

今年度も私たちと関わり、活動をするとともに協力していただいたカウンターパートの二瓶晃一さんをはじめ、地域活性化に尽力されている地域住民の方々には大変お世話になりました。この場をお借りして敬意を表します。また、本事業において私たちをサポートしていただいた福島県地域振興課、および社会システム株式会社の皆様など多くの関係者の皆様には大変お世話になりました。御礼を申し上げます。